

第 22 回(2014.05.13 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

石(こく)と俵(ひょう)

武士の俸禄(家禄、給料)が 100 石とかに 200 石とか表現されますが、ときには「石」ではなく 100 俵とか 200 俵とか、「俵」で表されることがあり、混乱しがちです。

江戸時代の経済は米でした。したがって武士の俸禄は米で支給されていました。この支給方法に「知行取り(ちぎょうとり)」と「蔵米取り(くらまいとり)」がありました。知行取りは、最も格式の高い支給方法で、一定の知行地(領地)を与えられて、そこから得られる年貢を取り立てることができました。ですから「石」で表し、蔵米取りは米の現物支給でしたから「俵」なのです。また、下級武士は銭で支給されていた者も多くいました。

昔は田畑や屋敷などの土地面積に一定の計数をかけて米の生産高に換算し、石単位で表しました。これを石高(こくだか)といいます。大名や武士の俸禄は、基本的には石高で表されました。この石高は土地面積の計測によって、また土地の優劣によって生産高に大きな差が生じました。知行取りは、領地を管理しますから警察権、裁判権などをもち、必要に応じて領地から人夫を徴用することができました。それだけに、大名や高級武士でなければ知行地の管理ができなかったわけですが、また天候不順などにより米の作柄が減少すれば収入も減り、毎年一定ではありませんでした。

また、時代によって違ってきますが、主として当時の年貢の収めかたは、玄米 1 石を 1 両に換算し、ある一定の税率をかけて収めさせました。多くは農民が 6 割、領主が 4 割で、これを「四公六民」といいました。たとえば家禄が 400 石といっても、それは表高(額面)であり、実際の収入は 160 石でした。したがって、旗本の多くが 500 石以下でしたから、役職につかない武士の生活は非常に苦しかったといえます。蔵米取りは、幕府あるいは大名家の蔵から米を現物支給される方法でしたから、50 石とか 100 石といわず、50 俵とか 100 俵など俵で表示しました。この蔵米は、年 3 回に分けて支給されたため「切り米」とも呼ばれました。

また、下級武士などは現金支給でした。時代劇などに出てくる下級武士を町民たちが「サンピン」と呼びますが、この言葉は、俸禄が 3 両 1 人扶持(さんりょういちにんぶち)の貧乏な武士を侮蔑した言葉で、3 両の 3(サン)と 1 人扶持の 1(ピン)からきています。このピンはサイコロの 1 の目ですが、もとは「ピンからキリ」のピンです。長崎に伝来した「ウンスンかるた」の数字の 1 がピンで 10 は十で十字架だからキリストのキリなのです。なお、一人の扶持は 1 日米 5 合の計算で支給されていたから、1 年間で 1 石 8 斗になる勘定です。日本人が 1 年に食べる米の量は、およそ玄米 60 kg くらいで、おおよそ 1 石(150 kg)あれば一人が養えると想定されて決まったようです。

江戸時代の諸藩は、収納した米をより有利な形で換金するために、江戸や大坂などに蔵屋敷を設けて、藩内から米を運び込んで市中の米市場に売却しました。これも「蔵米(くらまえ)」と呼びました。これに対して、蔵屋敷を経由せずに商人の手で集荷される米を「納屋米(なやまい)」と呼びました。大相撲の国技館は両国の以前は蔵前にありましたが、ここは徳川幕府の米蔵があったところでした。そこから蔵前の地名がついたといわれています。

当時、幕府の米蔵は浅草にあって、蔵前には「札差(ふださし)」と呼ばれる商人たちが軒を並べ、旗本や御家人に支給される米の仲介や、米を担保に高利で金銭を貸し付けて大儲けしました。特定の武家と契約した札差は、「蔵宿(くらやど)」と呼びましたが、江戸も末期になると

武士の生活も苦しかったから、この米を担保に借金をして、蔵宿とのもめ事が絶えなかったようです。武士には体面がありますから、蔵宿の町民に頭を下げることはできませんから、代わりに頭を下げたり脅したりする浪人などに依頼しました。この者たちを蔵宿師と呼びましたが、これに対抗して蔵宿の方も屈強な人物を用心棒として雇ったりしました。武士の中には10年、20年後の蔵米を担保にする者も出てきて、幕府は「棄捐令(きえんれい)」という借金をチャラにする政策を取りました。現代の法律でいう「自己破産」よりもっとおいしい政令でしたが、この給米制度と金銭との二重構造は、結果的に幕藩体制の崩壊に繋がったのです。現在、日本政府は「国債」という莫大な借金を抱えています。政府が「棄捐令」を発するのではないかと国債を買っている人は、さぞご心配でしょう。

金貨と銀貨

時代小説などで「小判」や「一分金(いちぶきん)」などという貨幣が出てきますが、ときどき「一分銀」という言葉が登場しますから混乱します。当時は、東日本では金貨建て、金貨支払いで、西日本では銀貨建て、銀貨支払いが普通だったことからきているのです。

江戸時代の貨幣制度の特徴を端的に表した言葉に「東国の金遣い、西国の銀遣い」があります。それは、東日本には金の産地が多かったのに対して、西日本には銀の産地が多く、さらには中国との貿易で銀貨を使用した慣行があったこと、などによるものと考えられています。なお、少額貨幣は錢(ぜに)と呼ばれる銅貨が使用されました。

金建てでは、大判、一両小判、二分金、一分金、二朱(しゅ)金、一朱金などが使われましたが、銀建てでは、丁銀(ちょうぎん)、豆板銀(まめいたぎん)という形も重さも一定ではない「秤量貨幣」が使われていました。この秤量貨幣は、いちいち目方を量って使うので不便でしたから、後に一分銀、二朱銀、一朱銀、12枚で1両になる五匁銀(ごもんめぎん)などの定位貨幣も鑄造されました。流通量の多い錢貨については、寛永通宝という銅貨に統一されて各地の錢座で鑄造されました。

大判金貨は10両に相当しましたが、ほとんど流通せず、贈答品など儀礼的なことに使われていたにすぎません。小判や一分金などの金貨は、江戸金座、京都金座、駿河小判座、佐渡小判所という鑄造所で造られていましたが、元禄8年(1695)以降は江戸に集中され、現在の日本銀行本店の場所に「金座」という金貨を鑄造した役所がありました。

江戸時代中期から後期になると、物価上昇が激しくなり幕府の財政も悪化し、幕末までの間に8回も金貨銀貨の改鑄が行われ、材質が悪化しました。江戸時代最後の万延小判は、大きさも極端に小さく、純金量も江戸時代初期に造られた慶長小判の1割強しかありませんでした。

秤量貨幣を別にすると、江戸時代の貨幣は四進法が基本で、1両は4分、1分は4朱、すなわち1両は16朱になります。また、1両は銀60匁で錢4000文(もん)、1分は1000文としており、1000文のことを1貫文(いっかんもん)といいました。錢は十進法で、一文錢の他に波錢と呼ばれる錢に波の模様が入った四文錢があり、これが広く使われていました。錢を「錢さし」と呼ぶ紐に96枚を通して100文として通用していました。

また、銀貨を鑄造する「銀座」は江戸、京都、大阪、長崎にありましたが、寛政12年(1800)江戸に統合され、現在の銀座・京橋にありました。各地にある「銀座通り」は東京の銀座通りにあやかってつけたものかもしれませんが、以前どこかの村の通りに「銀座通り」と付けたら、「知識人」などと称している連中からクレームがついたという下らない話がありました。いっそのこと「金座通り」にすればよかったですでしょうか。

余談ですが、「下らない」という言葉の語源ですが、江戸時代には京都を中心とした関西から江戸に入ってきた物を「下りもの」と呼んでいました。京都には天皇がおりましたから「上(かみ)」で、それに対比して江戸を「下(しも)」と呼び、天皇を奉る意味合いもあって、京都から江戸に持ち込まれた品物は「極上物」という意味をもちました。そこから「下らない」という言葉が

「下等品、つまらないもの」という意味に使われるようになったのです。明治以降は天皇が東京に住んでおられるため、東京が上(かみ)で関西が「下(しも)」になりました。そういえば、地方から東京見物をする人を「お上りさん」と呼んだ時代もありました。

(篠井純四郎)